

## R 6 年度全国公立学校教頭会研究大会（高知大会）

### 第 1A 分科会『教育課程に関する課題』

（報告者）出雲市教頭会所属

#### 1 発表の概要

第 1 A 分科会は、高知大会の大会主題『未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり』に迫るための教育課程における副教頭・教頭の関わりについて、2 例の実践発表が行なわれた。

(1) 「義務教育学校開校に向けた教頭の役割～教職員が主体的に取り組むためのカリキュラム・マネジメント～」(提案者) 美咲町教頭会

① 研究のねらい：美咲町における義務教育学校の意義を教職員が理解し、学校づくりに参画する主体性を高めるために、「各種教育・各教科等指導計画」を通して、教頭に求められるマネジメントを探る。

② 研究の概要：施設の老朽化と防災面の課題解消、及び人口減少対策として、地域に学校を残し、地域と共にある学校づくりを目指して、R 5 年度、R 6 年度に設立された美咲町立旭学園と柵原学園の義務教育学校における実践が発表された。両校の教頭は、教務主任と連携し、美咲町の教育振興計画等（義務教育学校のめざす方針）に基づいた各種教育・各教科等指導計画等を教職員に助言しながら作成した。その際に、統合される各校の独自の文化を尊重するとともに、地域コミュニティとの連携を重視し、地域の特色を活かした教育活動（キャリア教育の充実、生活科・総合的な学習の時間を軸とした探求的な学び）となるように、研修会を実施した。今後は、P D C A サイクルを回しながら、よりよい具体的取組の作成に助言を行って行く予定である。

(2) 「連携型中高一貫教育の推進における教頭の役割～那賀地域中高一貫教育の取組を通して～」(提案者) 那賀町教頭会

① 研究のねらい：R13 年度から始まった連携型中高一貫教育が定着し、一定の成果を得られているが、教職員の異動に伴う共通理解の継続が難しいことや、中高間の教育課程の違いなどの課題が生じている。このため、中高一貫教育の各委員会の委員長を務める教頭の役割を明確にし、進化・発展させるための方策を検討し、実践する。

② 研究の概要：徳島県那賀高校と連携中学校（R13 年度 6 校→現 3 校）との中高一貫教育は、那賀地域中高一貫教育研究委員会（県教委指導主事、那賀町教育長、連携中・高校長、教頭で構成）が示す方針のもと、5 つの専門委員会（教務委員会、進路指導委員会、人権教育推進委員会、生徒指導・特別支援委員会、特別活動委員会）が計画の立案・実践を行なっている。課題は、教頭の異動後も取り組みが継続すること、形骸化の防止が挙げられた。

#### 3 まとめ

小中連携（一貫）教育の教育課程の作成は、授業の持ち方等文化の違いが、小学校と中学校で異なり、難しさを伴う。しかし、子どもの減少等に伴い義務教育学校が増加している現状を鑑み、地域の特色を反映したスクールミッションやグランドデザインを策定し、教職員一人ひとりが自分事として捉え、実践していく必要がある。教頭は、「職員室の担任」として、様々な活動計画の見取り・価値付けを行ないながら、よりよい教職員集団の形成をめざす。また、教職員だけでなく、地域・保護者・諸機関をつなげ、P D C A サイクルを通じて、評価していくことも重要である。

## R 6 年度全国公立学校教頭会研究大会（高知大会）

### 第 1A 分科会『教育課程に関する課題』

（報告者）出雲市教頭会所属

#### 1 発表の概要

第 1 A 分科会は、高知大会の大会主題『未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり』に迫るための教育課程における副教頭・教頭の関わりについて、2 例の実践発表が行なわれた。

(1) 「義務教育学校開校に向けた教頭の役割～教職員が主体的に取り組むためのカリキュラム・マネジメント～」(提案者) 美咲町教頭会

① 研究のねらい：美咲町における義務教育学校の意義を教職員が理解し、学校づくりに参画する主体性を高めるために、「各種教育・各教科等指導計画」を通して、教頭に求められるマネジメントを探る。

② 研究の概要：施設の老朽化と防災面の課題解消、及び人口減少対策として、地域に学校を残し、地域と共にある学校づくりを目指して、R 5 年度、R 6 年度に設立された美咲町立旭学園と柵原学園の義務教育学校における実践が発表された。両校の教頭は、教務主任と連携し、美咲町の教育振興計画等（義務教育学校のめざす方針）に基づいた各種教育・各教科等指導計画等を教職員に助言しながら作成した。その際に、統合される各校の独自の文化を尊重するとともに、地域コミュニティとの連携を重視し、地域の特色を活かした教育活動（キャリア教育の充実、生活科・総合的な学習の時間を軸とした探求的な学び）となるように、研修会を実施した。今後は、P D C A サイクルを回しながら、よりよい具体的取組の作成に助言を行って行く予定である。

(2) 「連携型中高一貫教育の推進における教頭の役割～那賀地域中高一貫教育の取組を通して～」(提案者) 那賀町教頭会

① 研究のねらい：R13 年度から始まった連携型中高一貫教育が定着し、一定の成果を得られているが、教職員の異動に伴う共通理解の継続が難しいことや、中高間の教育課程の違いなどの課題が生じている。このため、中高一貫教育の各委員会の委員長を務める教頭の役割を明確にし、進化・発展させるための方策を検討し、実践する。

② 研究の概要：徳島県那賀高校と連携中学校（R13 年度 6 校→現 3 校）との中高一貫教育は、那賀地域中高一貫教育研究委員会（県教委指導主事、那賀町教育長、連携中・高校長、教頭で構成）が示す方針のもと、5 つの専門委員会（教務委員会、進路指導委員会、人権教育推進委員会、生徒指導・特別支援委員会、特別活動委員会）が計画の立案・実践を行なっている。課題は、教頭の異動後も取り組みが継続すること、形骸化の防止が挙げられた。

#### 3 まとめ

小中連携（一貫）教育の教育課程の作成は、授業の持ち方等文化の違いが、小学校と中学校で異なり、難しさを伴う。しかし、子どもの減少等に伴い義務教育学校が増加している現状を鑑み、地域の特色を反映したスクールミッションやグランドデザインを策定し、教職員一人ひとりが自分事として捉え、実践していく必要がある。教頭は、「職員室の担任」として、様々な活動計画の見取り・価値付けを行ないながら、よりよい教職員集団の形成をめざす。また、教職員だけでなく、地域・保護者・諸機関をつなげ、P D C A サイクルを通じて、評価していくことも重要である。

## 1 提言の概要

【提言1】〈提言テーマ〉義務教育学校開発に向けた教頭の役割について  
—教職員が主体的に取り組むためのカリキュラム・マネジメント—  
〈提言者〉岡山県久米郡副校長・教頭会

### (1) 研究のねらい

#### 美咲町における義務教育学校の意義について

教職員が理解し学校づくりに参画する主体性を高めるために、「各種教育・各教科等指導計画の作成」を通して、教頭に求められるマネジメントを探る。

### (2) 研究の概要

#### 美咲町立旭学園

##### ○小中合同企画会の実施

- ・小中合同企画会で管理職・教務主任間で協議、検討、共通理解
- ・起案文書と美咲町教育振興基本計画、学習指導要領等との整合性の確認

##### ○教務主任との連携

- ・小中合同会議の年間計画作成、各種教育・各教科等指導計画作成への助言と確認

#### 美咲町立柵原学園

##### ○小中一貫教育担当者会の実施

- ・小中一貫教育担当者会を月1回開催し、統廃合スケジュールや組織等を検討

##### ○探求的な学び研修会と柵原地域合同研修会

- ・外部講師を招いた探求的な学びの研修会や統合3校の教職員参加の授業公開と乗り入れ授業の実施
- ・統合する地域を知るための柵原地域合同研修会の実施

### (3) 成果と課題

#### 美咲町立旭学園

○各種教育・各教科等指導計画作成への助言を行ったことは教職員の義務教育学校への共通理解を深めることに有効であった。

●開校前の各小中学校の取組がそれぞれ異なるため、具体的取組の作成に想定以上の時間と労力がかかった。改善点があれば柔軟に対応する必要がある。

#### 美咲町立柵原学園

○生活科・総合的な学習の時間を軸としたキャリア教育を最初に作成したこと、探求的な学びの研修会を行ったことで、地域の実態に応じた計画の改善や他計画との整合性、関連性を図ることができた。

●小学校課程と中学校課程の調整に時間を設定すること、新しく赴任してきた教職員への研修を行うことが必要である。

## 1 提言の概要

### 【提言2】〈提言テーマ〉連携型中高一貫教育の推進における教頭の役割

—那賀郡地域中高一貫教育の取組を通して—

〈提言者〉徳島県那賀郡教頭会

#### (1) 研究のねらい

連携型中高一貫教育を各校の教職員で組織する研究委員会が中心となり進めている。研究委員会は5つの委員会から構成されており、委員長を各校の教頭が務めている。そこで、教頭が中心となり、各委員会の取組を振り返り、連携型中高一貫教育を進化・発展させていく方策を検討し、実践していく。

#### (2) 研究の概要

- 第1回那賀郡地域中高一貫教育研究委員会
  - ・例年5月に開催し、参加者は県教育委員会学校教育指課導主事2名、那賀郡教育委員会教育長、連携中学校・高等学校の校長・教頭であり、現況の説明及び昨年度の取組の確認、本年度の方針を立案した。
- 各専門委員会における計画の立案
  - ・第1回研究委員会の方針を確認後、各委員会において教頭が中心となり、本年度の計画を立案した。
- 第2回那賀郡地域中高一貫教育研究委員会
  - ・8月下旬に実施。最初に各担当教頭から本年度の計画について説明、その後各専門委員会の計画の再検討。
- 各専門委員会における実践と振り返り
  - ・教務委員会、進路指導委員会、人権教育推進委員会、生徒指導・特別支援委員会、特別活動委員会による実践報告と振り返り。
- 第3回那賀郡地域中高一貫教育研究委員会
  - ・今年度の取組について、各専門委員会担当教頭から、成果と課題について報告。

#### (3) 成果と課題

- 那賀高校の教師が各中学校で授業を行うことで、中学校生徒のモチベーションが高まった。また、教師にとっては異校種の授業を互いに参観できるため、指導力の向上につながった。
- 中高生によるオンライン交流で、中高の縦のつながりと中学校間の横のつながりを密にすることができた。
- 高校及び各中学校で行われる人権学習の公開研究授業及び授業研究会に参加することで、教師の資質向上を図ることができた。
- 町内中学校、那賀高校、青少年育成センター、阿南警察署生活安全課、PTAが連携し、地域ぐるみの生徒指導体制を構築し、生徒の健全育成を目指している。
- 各校の生徒会執行部が集まり、異なる学校の生徒同士がグループになり、「那賀地域生徒会シンボルキャラクター」を作成し、地域の良さを知る良い機会となった。
- 那賀地域中高一貫教育がマンネリ化しないように、各学校の委員が協働的に新しいアイデアを盛り込み、取り組んで行く必要がある。
- 担当教頭が変わっても、取組を着実に積み重ねることができるようにすることや、取組の形骸化を防ぐ必要がある。

## 1 「地域の特性を生かした魅力ある教育活動を目指して—小中連携教育を推進するための教頭の関わりを通して—」福岡県行橋市教頭会

### ○発表の概要

みやこ伊良原学園は、同じ校舎内に小学部・中学部がある。そのメリットを生かして、小中合同の職員会議の実施、ルールの共通化、乗り入れ授業の実施、一緒に活動する総合的な学習の時間など、効率的、系統的な実践を積み重ねておられた。

小中を通した学びや育ちを支える教育課程による教育実践の例として、1～4年の「学びの土台づくり」、5～7年の「学びの定着・拡充」、8～9年の「自己学習力の深化」と段階的に学び方を身に着けさせていくシステム、「伊良原タイム」による学習内容の定着を図る取り組み、中学校教員による乗り入れ授業の紹介があった。

生徒指導・校内研究等の小中教員の協働体制として、小中の教頭と主幹教諭が週一回の運営委員会を開くとのことだった。学校全体の動きを教頭がリードする様子がかうかえた。

地域の特性を生かした魅力ある教育活動として、茶摘みやゆず胡椒づくりなど地域の特性を生かした体験活動や、地域の人との出会いが多く取り入れられている。

### ○協議

「地域の特性を生かした小中連携教育を推進するための副校長・教頭の役割」をテーマとしてブレイクアウトルームに分かれて協議した。

小中連携をしていく上で難しいことの1つが、小中の壁を壊していくことだ。「生徒指導は自分事として考えやすい。学力向上は自分事として考えにくい。」という言葉があった。

小中連携を学力向上に生かしていくために、ミドル層に任せられるものは任せる、協働する力・つながり・学校のチーム力を高めるなどの話があった。教頭の職務として、「学び続けている人は満足度が高い」、「仕事そのものにやりがいを感じる」、「校内にいい関係性がある」といったことを意識して学校づくりに取り組もうとの助言があった。

## 2 「魅力ある学校づくりに向けて教育家庭の編成・実践評価 —教職員の協働的な学び（授業づくり）および児童の関わりを通して— 高知県いの町教頭会

### ○発表の概要

いの町立伊野小学校は、従来の校内研究のやり方の課題に着目し、全教職員が関わる校内研究に向けて舵を切った。具体的には、授業者が単元を決定した後に、低・中・高ブロック会ごとに教材研究を行い、教材研究会で単元のデザインについてそれぞれのブロックがプレゼンし、指導案を作成していくというものであった。文献や学習指導要領を読み、ポイントを抽出する作業をみなが行うので、皆のスキルアップを図り、授業者の負担を軽減させることができたとのことだった。

また、「ふらっと1UP」という取り組みも参考になるものだった。授業力向上のために年間2回授業を公開しているのだが、それとは別に、日頃から短時間授業を見合い、写真をとって終礼で共有するとのことだった。撮った写真を共有ドライブのスプレッドシートに貼り付け、ごく短いコメントを書き込んでいた。職員のがんばりを可視化し、学びを共有する取り組みであった。

個別最適な支援としては、全校児童の「きもちメーター」の確認、複数体制での朝の靴箱チェックの様子が紹介された。

学力向上の取り組みとしては、「学力向上ロードマップ」を作成し、学力調査の終了後の分析後、どの学年で、いつ、誰が、何をするかを明記しておられた。これは、チェックリストにもなっており、できたかどうかを確かめたり、加筆したりできるようになっていた。

このような様々なシステムを取り入れるために、教頭が他校の手法を紹介したり、研究主任と連携して研究体制を整えていったりしたとのことだった。

### ○協議

協議では、伊野小の取り組みからの学びを話し合った。その中で、各地の様子の情報交換も行った。宿題なしの取り組み、掃除なしの日の設定、高学年でも15時半から放課後であること、反転学習による学力低下が見られなかったこと、外国籍の児童の増加など他県の様子を聞いて、まだまだ働き方改革のポイントがあると感じた。

どちらの発表も、質を落とさずに教職員の負担を減らすこと、プロセスと結果の可視化がポイントであると感じた。「無駄を作らず、知恵を絞る」、この言葉を踏まえて目の前の課題に向き合っていきたい。